

雑草と付き合った50年の軌跡 (7)

日本原色雑草図鑑の刊行 (その4)

全国農村教育協会 廣田伸七

●写真撮影が壁にぶつかった

この雑草と付き合った50年の軌跡の原稿を書いている2010年(平成22年)現在では、植物に関する図鑑類が数多く出版されている。一般的に図鑑を出版する場合、目的をもって、例えば野草図鑑、耕地雑草図鑑、〇〇山の野草、〇〇県の植物といったように企画の段階ではこの図鑑にはこれだけの種類の植物を掲載するという計画を立てるが、企画通りに写真や資料が集まることは殆どない。こうした場合、多くは集まらなかった種類の植物は計画から削除して編集し完成するのが普通である。

日本原色雑草図鑑の場合はそれが許されなかった。「日本原色雑草図鑑」として銘打って発行するからには、企画当時(昭和40年(1965年)代前半)の耕地雑草、つまり水田・畑地・樹園地などで作物の栽培上、作物に雑草害を及ぼす雑草及びその可能性のある雑草を選定してあるので、最低これだけの種類は掲載し、追加種がある場合は追加するという大原則が決められていた。従って今回の「日本原色雑草図鑑」の場合は写真が集まらないから削除するという安易な編集をすることは許されなかった。是が非でも計画のリストにある草は撮影しなければならぬ。最初はこの枷はそれ程苦しいものではないと考えていたが、いざ撮影を開始してみるとこの枷は大変なものだと次第に分かり、じわじ

わと締め付けられてきた。

企画のリストでは310余種(余種とは若し撮影できれば追加するという種)で最低は310種。当時の一般的な耕地雑草は水田・畑地・樹園地を合わせて約200種、これらは多少の地域差はあるがほぼどこでも見られるので撮影には苦勞しなかった。次に場所によってあるものとなないものがある。例えば海沿いの耕地でよく見られるもの、内陸部でよく見られるもの、甲信越から東北、北海道など寒冷地に見られるもの、関東から西の暖地に多く見られるものといった場所によってよく見られるものが約80種、これらの雑草は生育場所と時期の見当をつけて探しにいけばほぼ撮影することができた。残りは約30種、これらは昭和40年、41年と各地を撮影しながら探したが見つからなかった草種である。

昭和40～41年と2ヶ年にわたって精力的に各地を廻り雑草の撮影に全力を注いだ。地域は関東一円をはじめ北は福島、宮城、甲信越は山梨、長野、新潟、更に東海は静岡、愛知、三重の各県まで足を伸し、雨の日は除き天気の良い日をねらって春から秋にかけて1ヶ月のうち半分以上雑草の撮影に専念した。この間に撮りためた雑草の種類数は約270～280種、その上主要種については芽生え、幼植物、生育中期、成植物、花、果実、ときには多年生雑草のミズガヤツリ、ウリカワ、オモダカ、ヒルムシロ、クログワ



▲多年生雑草の地下茎や塊茎を撮影。左はミズガヤツリの地下茎と塊茎の形成状況。右はウリカワの繁殖の様子と塊茎

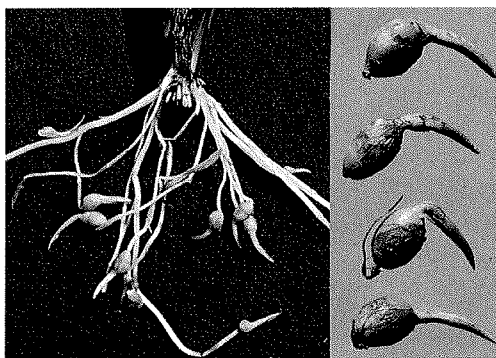
イといったものについては株を引き抜いて洗い、地下茎の伸びる様子や塊茎の写真を食欲に撮りためた。写真枚数にするとでの悪いものまで含め、恐らく5～6万枚に達した。昭和41年(1966年)秋、撮影シーズンが終った頃に2年間の成果を整理してみたら、計画全体のほぼ70%ぐらいの雑草の撮影が終っていた。しかし、今まで撮った写真の中でも不満足のものがある。また、芽生えや幼植物などの撮り残しもかなりある。これらも撮り直さなければならない。だが、これらの撮り残しの芽生えや幼植物などは今まで撮影した経験があるので生育場所が分かっているし、時期も見当がついているので時期になったら撮り直せばよいので問題はない。しかし、まだ全く未撮影のものが約30種あ

る。これらはどこに探しに行けばよいのか全く見当がつかない。しかも残された時間は来年、昭和42年1年だけ。もし探せなかったらと思っ

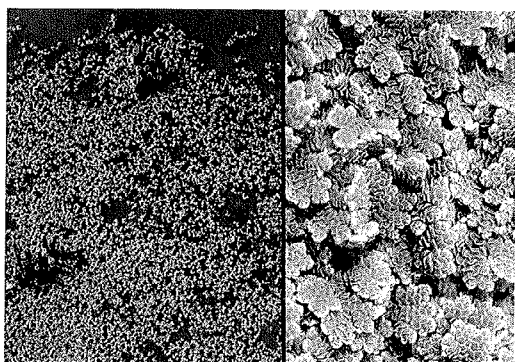
●^{かせ} 枷を破るその1・浅野先生の記憶を呼び戻す
昭和42年(1967年)は明けた。

撮り残した約30種はどうすれば探すことができるのか?。まず一つは浅野貞夫先生は40数年間にわたって関東各地、特に房総南部はくまなく歩き植物観察をしてきているので、浅野先生の記憶に頼ってその場所を案内してもらいそこで探す。これは確率がかなり高い。

春を待ちわびて、草が芽生える頃から浅野先生の記憶を頼りに探すことにした。まず狙った



▲左はオモダカの地下茎と塊茎、右はヒルムシロの地下茎と塊茎



▲オオアカウキクサ，春先紅色になる。右は拡大

のがオオアカウキクサ〔サンショウモ科〕，オオアカウキクサは夏の水田では水面一面を覆う害草であるがどこにでも見られるというものではない。しかし，場所によってはかなり発生するが，その場所が探せなくて今まで撮影できなかった。オオアカウキクサは春先に紅色が濃くなり水面一面を紅色に彩りよく目立つという特長がある。浅野先生の記憶をたどり千葉県成田地方の谷地田を探して歩いた。この当時（昭和40年代前半）はまだ谷地田には湿田が多かった。従って春先4月でも水田に水が張っていて，そこにオオアカウキクサが畳1～2畳の面積に広がり水面一面を紅色に彩っていた。湿田なので足を踏み入るとズブッとぬかる。そこでズボンの裾をまくりあげ，素足で湿田の中に入り夢中で撮影した。湿田が意外に深くズボンをまくり上げて入ったが，まくり上げたくらいでは足りなくて，ズボンは水と泥でグショ，グショ，春先なので水はまだ冷たい。そんな気持ち悪さや冷たさよりも探していた草が見つかった喜びの方が大きかった。この頃は湿田がかなりあちこちで見られた。こうした湿田では春先にいろいろな水田雑草が生えていた。このときも次の湿田に行ったときに，これも探していたデンジソウ〔デンジソウ科〕が見つかった。デンジソウ

は糸状の地下茎が地中を四方に伸びて，ところどころから長い葉柄を伸し，その先にくさび形の葉を4枚つけるがその形が十字状で，上から見ると田の字の形に見えることから田字草（デンジソウ）と名付けられたが，このデンジソウも春先の湿田ではかなり発生していた。デンジソウは当時では暖地の水田ではかなり多く発生し，水田の雑草であった。このデンジソウも探したが見つからなかったので浅野先生の記憶に感謝した1日だった。

ちなみに，オオアカウキクサやデンジソウなどは主にごうした湿田を越冬場所にしてい，春に田植えが始まると水の流れに乗って下流の水田に流れついて水田の雑草となっていた。この他にも当時の湿田ではミズワラビ，ミズニラ



▲デンジソウ。葉が田の字に見える



▲湿田に多くあったミズワラビ

などもよく見られたが、湿田がなくなった平成20年代' (2008年) では、オオアカウキサ、デンジソウ、ミズワラビ、ミズニラなどは各地で絶滅危惧種や希少種としてレッドデータブックに記載されていて時代の変遷をしみじみと感じさせられる。

浅野貞夫先生の記憶をたどって探し当てた草にナンバンギセル〔ハマウツボ科〕もある。ナンバンギセルはミョウガ、サトウキビ、ススキ、チガヤなどの根に寄生する寄生植物であるが、暖地でのサトウキビやミョウガに寄生して、ときに大発生して問題になる寄生植物である。これも発生するところではたくさんあるが、いざ探すとなると簡単に見つかる植物ではない。このナンバンギセルが発生した場所を浅野貞夫先生が昔見たことがあるというのでそこを案内してもらった。

場所は房総半島の南部、鴨川市から千倉に通じる国道のトンネルの上のススキが生えている場所で見たことがあるという記憶を頼りに、夏の終りの9月初めに浅野先生と車を飛ばして行ってみた。トンネルの手前の町の駐車場に車を入れて、トンネルのある山を登って行った。約1反歩(10アール) ぐらいの広さにススキが生えていて、そこを1株、1株探すこと約30分、ス



▲記憶をたどって探し当てたナンバンギセル



▲記憶をたどって探し当てたヌメリグサ



▲記憶をたどって探し当てたネズミノオ、右は花穂

スキの株元に奇妙な形をした紅紫色の花をつけたナンバンギセルを発見した。歓喜して撮影し、その付近を探すと数株見つかった。ナンバンギセルの名は、長さ4~5cmの茎の先に舟形をした「がく」の先にややくちばし状の紅紫色の花を横向きにつけ、その形がタバコを吸う「キセル」(漢字では煙管と書き、キザミタバコ〔刻煙草〕をつめて火を点じてその煙を吸う道具) に似ていることからこの名がある。浅野貞夫先生の記憶がピッタリと当たった事例である。その後各所を歩いたときにススキの野原を気をつけて見たがナンバンギセルは見当らなかった。こうして浅野先生の記憶をたどって探し当てた雑草はヤネグサ(タデ科)、アオガヤツリ(カヤツリグサ科)、ヒナガヤツリ(カヤツリグサ科)、イトイヌノヒゲ(カヤツリグサ科)、ヌメリグサ(イネ科)、ネズミノオ(イネ科) など10数種に及ぶ。



▲探しに行ったが見つからなかったミズキンバイ

しかし、総てがドンピシャリではなかった。ミズキンバイ（アカバナ科）は地下茎が泥の中を伸びてところどころから芽を出し、茎は円柱形で横にはったり斜上して、夏に茎先に黄色の花を咲かせる多年生の水田雑草で、暖地では多く発生するが、これも容易に探し当てられない草である。この草を浅野先生の記憶を頼りに千葉県勝浦の山沿いの水田地帯に探しに行った。半日歩き廻って探したが見当らない。先生はしきりに「おかしいな、確かにこの辺で見たのだから」と繰り返しつぶやきながら探し廻った。いい加減時間が経過した頃、私が「それはいつごろのことですか。」と聞くと「30年ぐらい前かな」と先生があっさり答えて大笑いしたことがある。失敗談も限りなくあった。このミズキンバイの後日談は、その後今度はトチカガミ（トチカガミ科）を探しに行ったとき、トチカガミは簡単に見つかりホッとして撮影して一休みした、先生と土手に腰をおろしてタバコを吸いながら、ふと下を見たら黄色い花が目にとまった。さては？……と思って土手を降りその細い溝に行ってみると、なんとあれ程探したミズキンバイが細い溝をうめて生育し黄色い花を咲かせているではないか、「先生、ミズキンバイがあった」



▲偶然に見つかったハンゲショウ、白い斑が美しい

と叫ぶと先生も来てくれて、ミズキンバイと確かめてくれた。こんな幸運な日もあったのである。

●^{かせ}枷を破るその2・偶然に運を託す

撮り残した雑草を探し当てる手段のその2は破れかぶれ、一か^{ばち}八^{ばくち}かの博打にでて、運を天に任せた？ここまでやって探せない雑草はいくらリストに記載してあっても削除するしかないと思腹を決めてかかった。

スブタ（トチカガミ科）も探しあぐねた雑草の一つである。暖地に多い雑草なので房総南部の鴨川市の水田地帯を探して歩いた。半日以上歩いたが見当らない。くたびれて遅い昼食をとろうと午後3時過ぎに食堂に入り食事した後、タバコを吹かし外を眺めていたら、変なものが目に入ってきた。食堂から20mぐらいの先にある水田の中の溝に高さ1m前後で葉に白い斑のある植物が列をなしてあるではないか。ひょっとしたら探し求めていたハンゲショウ（ドクダミ科）ではないか。食堂の勘定もそこそ急に現場に行ってみた。確かにハンゲショウだった。スブタは探せなかったが、天が与えてくれたハンゲショウだった。ちなみにスブタは最後まで私とは縁がなく、遂にカメラに収めること

はできなかったが、幸い農業試験場の先生にお借りできたのでリストから削除という最悪の事態は免れた。

また、天はこんな偶然も与えてくれた。ミズオオバコ（トチカガミ科）は水田などに発生し根ぎわから長い柄をもった大きな葉を水中に広げるが、この形がオオバコに似ているのでミズオオバコといわれる水田の害草である。これも探せなかった雑草の一つであった。千葉県茂原周辺を撮影した夏の或る日、帰る途中都内の荒川橋を渡るとき、車が渋滞して止まったとき、下の川を見ると水面に白い花が多数咲いているのが見えた。その日はそのまま帰ったがどうも気になるので、翌日車で現場に行ってみた。川岸からかなり離れているのでパンツ1枚になり川に入り水草を採集した。それが探し求めていたミズオオバコという水田雑草だった。嬉しくなりビニール袋に入れて、持ち帰り、早速大きな「タライ」を買ってきて水を入れそこにミズオオバコを浮かべて撮影した。タライの中に浮かべたとは思えない写真になった。また、こんなこともあった。私は運をかつぐ訳ではないが、くたびれて一休みし、タバコをくゆらせて周辺を眺めると、探している草を発見することが度々あった。こんなことから、探している草に出会えなくてムシャクシャしたとき、運が向く



▲偶然の贈りものミズオオバコ



▲お呪のご利益で見つかったウシクサ

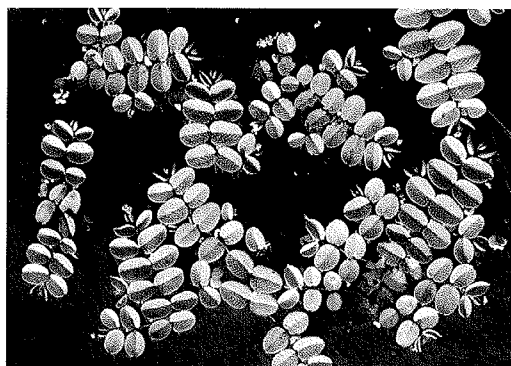
ように敢えて腰をおろしてタバコを吸った。秩父の傾斜のきつい畑を歩きウシクサ（イネ科）を探しに行ったとき、この日もかなり探したが見つからない。諦めて帰ろうと坂道を下りてきたとき、ひとつお呪いをやってみようと思いついた。腰をおろしてタバコを吸うことである。実行した。となんと腰をおろしたその場所で見つかった。何か変な感じだったが事実である。ウシクサは草丈が畑地では5～8cmぐらいのものが多く、葉も細く小さいので見落とし易い雑草である。それが腰をおろしたすぐ側にあったということは目線が低くなったということである。これでは立っていて見つけることは、まして葉の細いイネ科なのでかなり難しいことだと気がついた。この場合も偶然の発見であった。

浅野貞夫先生の記憶と偶然に助けられて残りの約30種の撮影も昭和41年（1966年）の暮れまでにはほぼ終了し、全体としては目標の95%までは達成することができた。残りの5%の補正は翌42年の編集期間中に撮影すれば間に合うので、計画したリストの雑草の100%を収録でき、おまけに余種とした追加種も20種ぐらい掲載できる見通しがたった。昭和42年の正月はホッとするとともに満足感にひたれる正月となった。

〔余話〕 古き良き時代を偲ぶ

現在、平成22年1月（2010年）に昭和43年（1968年）10月に完成した「日本原色雑草図鑑」の制作過程（昭和39年～43年〈1964～1968年〉）を振り返ってみると約40年前の出来事であったが、たった4年間で約330種の雑草を撮影し、しかも主要種では芽生え、幼植物、成植物、花、果実、一部地下茎・塊茎など過程を追った写真を撮影できたのは40年前だからこそできたことで、平成20年代では到底不可能だったと感じている。40年前は正直に言って雑草の撮影には良き時代だったと痛感している。

第一の理由は多種多様の雑草がどこにでも生育していたことである。特に水田雑草は現在の環境ではかなり変わってしまった。昭和40年代前半では湿田が多くあった。湿田は一年中水があり、そこには水生雑草が多く生育していた。例えば「日本原色雑草図鑑」を作成するにあたって掲載種を探すのに苦労したアカウキクサ、オオアカウキクサ、デンジソウ、ミズワラビ、ミズニラなどが湿田に行けば比較的容易に探すことができた。また、湿田の耕起前にはミズハコベ、フサモ、タガラシ、キツネノボタンなどが多く生育していて、これらの雑草の撮影の絶好のフィールドだった。それが平成20年代（2008年）では湿田は暗渠排水工事が行なわれて乾田に変わり、また、大規模な耕地整理が行なわれて、溝や土だけの用水路がコンクリートで固められた溝や用水路に変わってしまった。水生雑草が多くあった湿田がなくなって、オオアカウキクサをはじめとするデンジソウ、ミズワラビ、ミズニラなどはレッドブックに掲載される時代となり、溝や用水路に土がなくなって、かつてはこうした場所によく生育していたトチカガミ、ミズキンバイ、サンショウモ、イチョウウキゴ



▲少なくなったサンショウモ

ケ、ミズアオイ、オオアブノメ、キカシグサなどが減少し、かつては水田の雑草だったこれらの雑草を探すのが難しくなっている。

第二は道路が整備されて雑草を撮影するには非常に不便になった。多くの雑草を探し、撮影するのに最も能率的なのは、道路を車でゆっくり走りながら水田や畑を見ながら目的の雑草を探し、見つけたらすぐに車を止めて、撮影するのが最も効率的であった。昭和40年代は水田や畑の耕地の道はジャリ道で、道の両側にはいたるところに車が駐車できる場所があった。しかも車も少ない。車をゆっくり走らせながら目的の雑草があると、適当な場所に駐車してすぐに撮影することができ非常に能率がよかった。平成20年代では農道も立派に舗装され、道の両側にはガードレールが作られ車を駐車する場所はどこにもない。しかも車が多くゆっくりなど走れない。仮に目的の雑草が見つかったとしても、車を駐車できる場所まで運び、そこから歩いて、ときに数キロも歩いて戻らなければならない。実に非能率である。雑草が生育する場所の現況といい、道路事情といい、昭和40年代は多くの雑草を短期間に撮影するには正に良き時代だったと懐かしむこの頃である。（つづく）